

今秋期70年代革命勢力創出へ 9月政治闘争の地平を踏まえ、9・30羽田現地へ実力進撃を貫徹す！

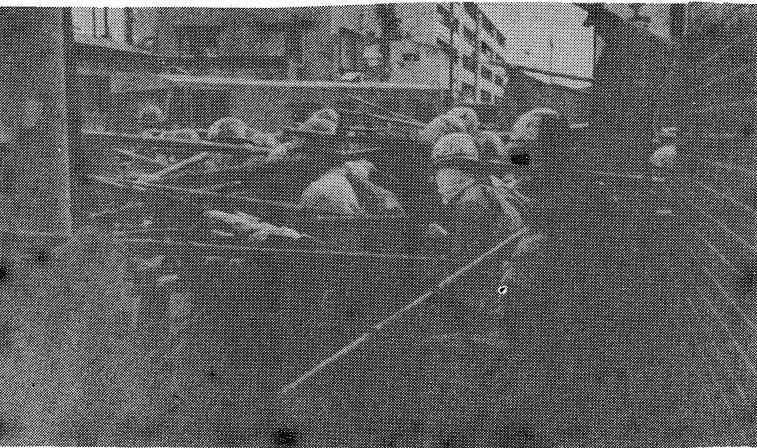
全国の同志諸君々 革命的労働者・学生諸君々

共産主義者同盟は党と革命勢力の飛躍を賭けた闘いとして九・三〇羽田現地における天皇派米阻止戦を貫徹し抜いたことを報告する。

関東労闘委・都学活を先頭とする九・三〇天皇訪米阻止全国実行委の隊列は日帝国家警察軍II機動隊の厳戒体制をぶち破り実力進撃を貫徹したこと、この闘いを革命勢力の全国的結集をもつて闘い抜いたことを全ての同志の前に明らかにしていきたく。

この羽田現地闘争こそは誰が日本階級闘争に責任を持ち、その最先頭を荷うのか、誰が熾烈な階級攻防戦から逃亡し、召還をきめ込み、帝国主義への屈服の道を歩むのかを誰の目にも明らかなるものとして示さずにはおかなかつた。

天皇制と天皇制イデオロギー攻撃との対決を回避し、それに屈服



九・三〇 機動隊粉碎・羽田現地武装進撃貫徹！



九・二九 明治公園を制圧する全国実行委八〇〇の部隊

九・三〇 天皇派米阻止の激闘を貫徹！

游 擊

第 12 号

月一回発行
1975. 10. 15

定価 100円

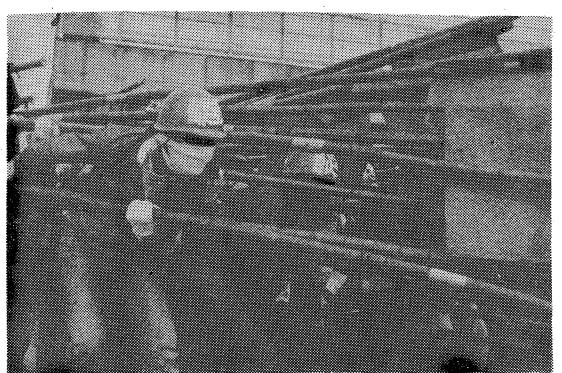
共産主義者同盟
游 擊 編 集 委 員 会
連絡先 私書箱四号
東京都世田谷区千歳郵便局
振替東京〇一九五七八三

スケジュール	
10月21日	日米「韓」反革命臨戦体制碎・狭山闘争勝利総決起集会／PM
6	
10月26日	東拘留紛糾闘争／AM12／東綾瀬公園
6	
10月31日	10・31差別判決一周年闘争／AM12／部落解放同盟
10	

今号目次

- ☆今秋期70年代革命勢力創出へ P1
- ☆弾対アピール P5
- ☆9・1闘争報告 P6
- ☆9・13～15安保日「韓」闘争 P6
- ☆9・30神奈川実行委報告 P7
- ☆破闘会第三回連続講座 P8
- ☆生協運動の新地平かちとれ！ P8
- ☆第四回全労交集会報告 P9
- ☆三里塚空港粉碎・鉄塔決戦へ P10
- ☆10・31狭山闘争へ P10

日帝打倒の革命勢力創出をもつて新たな10・8を戦取せよ



し、日本階級闘争の武装的発展を否定し逃亡する一切の日和見主義勢力を尻目に関東労闘委と都学活を先頭とする天皇訪米阻止全国実行委は唯一、羽田現地実力闘争を闘い抜いたのである。

我同盟はこの闘いの全成果を更に押し抜け、大胆に権力闘争の大道を切り拓き進撃することを全ての革命的労働者・学生諸君に明らかにしていきたい。

九月三〇日早朝、準戒厳令体制を突破し、六郷橋緑地公園に結集した関東労闘委・都学活の隊列を先頭として全国実行委に結集した。一二〇〇名の革命的労働者・学生によって羽田現地闘争は終始戦闘的に闘い抜かれたのである。

この六郷橋緑地公園への結集に際して関東労闘委・都学活の権力闘争派の隊列に対して、政治警察の弾圧が集中し、三度に及ぶ検問が繰り返されたのである。しかし、この予防反革命弾圧を密集した隊列でもってはねかえし、集会場に登場した関東労闘委・都学活の部隊は終始戦闘的に集会を領導し、その発言においても、全国実行委結成の重大な意義とその任務を明らかにし、天皇制と天皇制イデオロギー攻撃にかけた日帝の野望を余すところなく暴露し、一切の日和見主義を許さず闘い抜く決意を明らかにしていった。

また、労共闘・医学連・京大同学会・各地方実行委等の固い決意に貫かれた発言によって集会の戦闘的雰囲気は増えもり上り、絶対に天皇の派兵を阻止すべく燃えるような決意に満ちてデモに出発したのであった。

当日の空港周辺の反革命警備体制は「特別警衛警備本部」の下に警官一萬九千人を動員し、空港への沿道のビルを限なく検索し、「リコブター・海上警備艇を繰り出し、また、「特別狙撃ライフル部隊」、「S・P」の配置という準戒厳令体制が敷かれたのであった。だが、このような反革命攻撃を一つ残らず打ち碎き、羽田へ向けの怒濤の進撃を貫徹せんとする全国実行委の隊列に恐怖した国家警察軍・機動隊は数十発の催涙弾と放水をもってこれに対応してきたのである。

だが、このようなむきだしの反革命攻撃も赤い決意に打ち固められた全国実行委、とりわけ関東労闘委・都学活の隊列にとつては恐るに足らず、三二名に及ぶ革命戦士の検挙攻撃にもひるむことなく最後まで実力闘争として闘い抜いたのである。

この全国実行委による実力闘争の意義はきわめて重要である。そ

れは諸党派、諸勢力が羽田現地闘争を設定する中で、天皇派米阻止闘争を唯一、実力闘争として闘い抜いたことである。

それは全国実行委が、単なる一日共闘ではなく、九・一関東大地震災五二周年、朝鮮人、中国人、社会主義者虐殺糾弾闘争を突破口に九・一四・一五日「韓」閣僚會議粉碎闘争を羽田一都内を貫ら抜いて闘い抜き、九・二九天皇訪米阻止青年労働者総決起集会への登場として勝ち取ってきたことにおいても明らかな様に革命的政治共闘として実行委を打ち固めてきたことにおいて初めて可能となるものであり、四四〇、共労、日向派等の日和見主義勢力・野合右派・プロックとは明確に区別された革命勢力としての登場として結実したものであつた。

九・一関東大地震災五二周年闘争は諸党派が、こぞつて室内集会でお茶を濁すなかにあって、日帝の朝鮮侵略体制に対決し、排外主義的・帝国主義的員體制と対決する日本プロレタリアートの任務を鮮明に提起する闘いとしてあつたのであり、日「韓」閣僚會議粉碎、閣僚訪「韓」阻止の闘いへと煮つめあげていくものとして存在したのであつた。

この闘いは九・一四日「韓」閣僚會議粉碎、閣僚訪「韓」阻止、羽田現地闘争、九・一五都内総決起集会としてひきつがれ、全国実行委の拡大と強化として着実に闘いとられていくのである。

また、この一四・一五闘争の前段闘争として九・一三全労活主催の日「韓」閣僚會議粉碎集会への関東労闘委の登場が存在したのである。この集会において戦闘的労働者に対し、秋期階級攻防戦を革命的政黨共闘・全国実行委に結集して闘い抜くことを訴え、また、この闘争を貫徹したのである。

「韓」閣僚會議粉碎集会へ対し、日帝打倒の革命勢力の創出をもつてことと不可分のものとして組合主義者、市民主義者との大衆的党派闘争を貫徹したのである。

「韓」民衆の苦闘に對し、日帝打倒の革命勢力の創出をもつて応えるのではなく、市民主義的、心情的「連帶」でお茶を濁そうとする第四インターこそは日本階級闘争の武装的発展に対し右から足を引っ張るものでしかなく、あらゆる戦線での徹底的な対決を不可避免とするものである。

事実彼らは「一発や二発の爆弾や火炎瓶でお茶を濁すことではなく」と公言し、その右翼的本性を露わにしているのである。

未だ自然発生的であるとはいえ、敵権力中枢や侵略企業に対する爆弾闘争や火炎瓶闘争に対し、それ自体を否定し、敵対する彼らの姿こそは日本階級闘争の激しい煮つまりが強要する分歧の不可避

性を示すものである。

彼らは政治警察の「過激派キャンペーン」に「左」から唱和し、「奴らは爆弾闘争派だ、あぶないから近づくな！」と叫び回っているのである。

この第四インターを中心とする野合右派ブロックによる羽田現地共闘なるものも、その「日米防衛分担反対」スローガンにも明らかのように除外主義への転落以外の何物でもない代物である。すなわち、日米帝国主義が「防衛」＝侵略反革命臨戦体制を分担すれば日本が戦争に巻き込まれてしまうというたぐいの徹頭徹尾排除主義的代物でしかないものである。

このような第二インター諸勢力との大衆的党派闘争の貫徹と路線的分歧点の鮮明化こそは自らを革命的政治潮流へと打ち鍛えていく上で不可欠のものである。

このような我々の基本観点は九・二九青年労働者総決起集会に対する全国実行委の隊列をもつての明治公園への圧倒的登場として、すなわち、全国実行委それ自身の闘いとして獲得されたのである。

官公労の戦闘的青年部共闘と都労活、神奈川労活の共催によるこの集会への参加は九・三〇闘争への前段決起として闘いとられたものであり、日々、資本、既成労組指導部と闘っている戦闘的労働者に対し、関東労闘委に結集し、全国実行委の旗の下に九・三〇羽田現地闘争を闘い抜くべく呼びかけるものとして存在したのである。

それは労活、青年部に結集する闘う労働者が戦場において一定の戦闘的展開を遂げつつも、未だその多くが組合主義、経済主義的枠内にとどまっている現実に対し、大胆にそこから解き放ち革命派の隊列に糾合する闘いであり、第四インター等の日和見主義、市民主義勢力との大衆的党派闘争として存在したのだ。

当日その第二インターの本性をむき出しにしつつ明治公園への登場を策した第四インター派は自己の日和見主義路線への後めたさも手伝い我が革命派の隊列に恐れをなし、集会終了時に至るまで公園に姿を見せることが出来ず、千駄谷駅前で悲鳴をかこっていたのである。彼らは我々のデモ出発後になつてようやく重い腰を上げ、アリバイ的に全く意気の上がらぬまま我隊列のはるか後方からとぼとぼとついてきたのである。

この九・二九集会への全国実行委の隊列の登場こそは第四インタ一等の日和見主義者との闘いを踏まえた革命派労働運動建設の視点に貫かれたものとして全国実行委が存在していることを満天下に指示したと言わねばならない。

社共は天皇制イデオロギー攻撃に対し大衆行動を何一つとして組織しようとしたばかりか、天皇問題に触れるなどを回避せんと必死になつてゐる。

また革マルは、「天皇問題は日本階級闘争に混乱を持ち込んだ」として、天皇制と天皇制イデオロギーと対決せんとする革命派に対しても、「アナクロニズムだ」と罵詈を投げつけるのである。このこと

は第四インター派においても同様であり、今回の天皇派米を「単なる儀礼的訪問」としてしか見ることができないのである。

彼らのこの天皇問題に対する態度こそは、それと真正面から対決するのではなく、あたかも個人的、精神的營為の問題でもあるかの如くすりかえんとする生粹の市民主義者と何ら變るところはない。

天皇の政治過程への本格的登場の意味を陰へし、帝国主義の攻撃を美化するという反動に手をかするもの以外ではないのである。事実、彼らは九・三〇天皇派米阻止戦を今秋期の政治焦点として煮つめ上げていくことに対し終始反対しつづけてきたのであり、九・三〇当日もアリバイ的デモでお茶を濁したのであった。

今回の天皇派米をめぐるこの分歧は、過去において天皇と天皇制イデオロギーに対する態度と闘いが革命的左翼と合法主義者の分歧点であつたことを見るならば、それが現在もまた然りであることを見示している。

関東労闘委一都学活を先頭とする全国実行委はかかる合法主義、日和見主義に対する鋭い批判を展開すると同時に、自らの全力量を挙げた戦闘をもつて今回の天皇派米にかけた日帝の思惑を暴露し、それと非妥協的に闘う革命勢力の存在を全人民の前にさし示したのである。

この我々の闘いは、天皇制と天皇制イデオロギー攻撃と対決すると表明し、大言壯語をぶつけていた諸君が九・三〇当日には目標の動員数をはるか下回り、カンパニアデモに終始した事実と比較しても、その意義は明らかである。天皇派米阻止戦を文字通り全人民政治闘争として正しく把えきり、これと闘う革命勢力の全国的総結集を成功させた意義はこのうえなく大きなものとして存在しているのだ。

そして、このことを突きつけられた全左翼勢力の回答こそが九・三〇羽田現地における各派の対応として現出したのである。

合法主義、日和見主義者は今回の天皇派米＝天皇の政治過程への本格的登場の意味を日帝のアジア侵略の質として見ることができずその逆に何かしらそれと分離させ、天皇制と天皇制イデオロギー攻撃を美化し、擁護せんとしているのである。

だが、考えてもみるがよいベトナム革命勢力に打破られたアメリカ帝国主義が、ベトナム革命の切り開いたアジア全域での革命闘争の激化に恐怖し、新らたなる反革命体制を日米「韓」反革命臨戦体制の強化でもつて構築しようとする策動の一環として、日米両帝國主義による、かつてなく強固な反革命同盟完成が現在存在するのであり、それを内外に誇示するものとして今回の天皇派米が位置していることは今や、誰の目にも明らかな明白な事実ではない

天皇制＝天皇制イデオロギー攻撃の本質と日和見主義者の登場

ジャーハン談によつて具体的、軍事的に煮つめられ、日「韓」閣僚会議によつて日一朴間で実践され、朝鮮への自衛隊・日本帝国主義軍隊の反革命出兵をも含めた日一米一朴間での協定が成立した直後の天皇派米が「単なる儀礼」であるはずがないではないか!!

事実は全く逆である!! 天皇の政治過程への本格的登場こそは日帝のアジア侵略反革命宣言であり、国内的には、戦後の国民総合理念の解体風化に歯止めをかけ、帝国主義政治への国民動員一反革命国民統合の環としてそれが存在していること、これ以外の何物でもないのである。

たしかに日本帝国主義は戦後の農地改革において小作人・地主関係を一掃し、その限りで戦前天皇制を支えた一つの物質的基礎が戦後は解消したかに見える。しかしながら、天皇と天皇制は文字通り日本帝国主義の「宝」として日米共同の保護の下に温存され、差別と分断支配の反革命的統合環として機能しつづけてきたのだ。

まさしく、天皇制と天皇制イデオロギーこそは戦前・戦後を貫ぬいて存在してきたのであり、天皇自らもそのことを公言しているのである。

日帝の指図に従い訪米に先立つてニューヨークの記者と会見した天皇セロヒトは「私の戦前・戦後の役割について何ら変化はない」。戦争開始の際は閣議決定があり、私はその決定を覆すことができなかつたが、終戦は閣内の意見がまとまらなかつたので私が決定した。私は日本の憲法に貫してしたがつてきた。」と語り、天皇が戦前・戦後を通じて国家元首であったと、はばかりることなく言明した上で「天皇制が二千年も続いてきたのは歴史を通じて皇室が国民の福祉にまず思いをいたしてきたからだ」と天皇神話を開拓も自ら天皇イデオロギーの積極的宣伝につとめたのである。

天皇が差別と分断をもとにした反革命国民統合の環として存在します自らも積極的にそのように振舞つてゐることは皇太子の沖縄派遣がありますところなく示してゐる。沖縄の軍事的、経済的侵略前線基地化攻撃の鋭い環としてある海洋博に名譽總裁として出席し、「沖縄人も天皇の赤子である」と訴えるこの「訪問」こそはそれであり、沖縄人民への同化攻撃として、更にはアジア侵略反革命としての内外への誇示こそがその本質なのである。

このような外に向けた侵略反革命宣言としての天皇の位置と同時に、内に向けた反革命国民統合の環としての位置を明確に把えきらなければならない。

それは、戦後の支配統合理念であるところの戦後民主主義の風化と解体状況の進行に色濃く規定されたものであり、誰が支配し、誰が支配されるかという「支配の仕組み」が文字通り透けて見える時代における新たな差別と分断支配の貫徹と統合の環として存在することである。

だが、言うまでもなく、このことをもつて直ちに帝国主義の「支配形態の転換」であるかの如く語つたり、「天皇制アシズム軍事独裁攻撃」を単線的に導き出すことは現在の帝国主義の攻撃の質を見誤らせるものでしかない。

むしろ、すでに述べた様に天皇制と天皇制イデオロギーこそは戦前・戦後を通じて貫して存在し、温存され続けたものであり、その時その帝国主義支配の環として存在してきたのである。もちろん、それは戦前においては、日本帝国主義支配の重大な精神的、物質的支柱としてあつたのである。(戦後の天皇の全国行脚、ミッテープーム等)

ロギーが今、本格的に政治過程に登場してきた意味を日帝の侵略反対する被抑圧民族圧迫、予防反革命攻撃として加えられていることを見なければならない。

日帝の朝鮮侵略植民地化攻撃に対する在日朝鮮人・組織の革命的決起を死ぬほど恐れる日帝は彼らに対する日常的監視・統制攻撃として、具体的には外登法改悪、入管法、入管体制強化、司法共助協定締結策動として押し進めようとしているのである。

また、このような侵略反革命体制への国民動員構造を重層的に創り出し、帝国主義支配統合の完成を目指んでいるのだ。

右翼民間反革命を天皇の名の下に結集させ反共突撃隊として育成せんとしているのもその一つである。今回の天皇派米に際しても日本郷友連、仏所護念会や数多くの宗教団体や婦人会などをその見送りに動員し、職業的反共右翼団体のみならず、数多くの団体を皇居や羽田へ動員したのである。これに呼応し、ブルジョアマスコミはこそつて皇室記事をもつてその紙面を塗りつぶし、一大セレモニーを演出したのだ。

このような反共右翼団体の動員と天皇制イデオロギーをもつてする一大攻撃を頂点として、職場とりわけ基幹産業部門においては同器、J.C.等の帝国主義労働運動の積極的保護育成・産業報国会化をもつて労働者大衆を帝国主義政治に動員し、侵略反革命体制の一環へと組織せんとしているのだ。

また、社共勢力に対しても保革連合・階級協調攻撃をもつてして、帝国主義の懷深く抱え込み帝国主義支配秩序の一翼に把えきらんとしている。「救国と国民的合意」の看板を掲げる日共や社会党の「歴史的大妥協」路線は今や後もどりできない地点にまで達つしているのだ。

このような帝国主義への総動員体制は、人民内部に幾重もの差別分断構造を形成拡大することにおいて可能となるものである。在日朝鮮人に對する差別排外主義イデオロギーの形成や、被差別部落大衆に對する差別の助長と拡大こそはそれであり、帝国主義支配の基礎としてあるのだ。そして、かかる差別分断支配を貫き、かつその頂点に天皇制と天皇制イデオロギーが存在するのである。このことは企業内においても、本工・臨工・社外工等の分断支配を形成し、労働者の团结の破壊と既成組合の本工組合主義としての助長として貫徹されているのだ。

このような帝国主義の攻撃一階級協調攻撃の一方で、革命党と革命勢力に對する集中的・破防法的弾圧攻撃が激化しているのである。九・三〇戦闘を前後して二度に亘る同盟事務所に對する不当捜索や九・三〇戦闘における三二名に及ぶ革命戦士の検挙攻撃こそは何よりもそのことを明らかにしてゐるし、九・三〇当日の羽田周辺における準戒厳令体制こそは何よりも有弁にそれを物語つてゐる。

9・30の成果を踏まえ革命派労働運動潮流の建設へ！

それが差別・分断支配の更なる強化とその上にたつた排外主義動員構造形成にむけた一切の統合環として存在していることが明らかにされた。医学連からは、防衛医大闘争の全成果をもつて九・三〇闘争への大衆的結集を克ち取ることが明らかにされた。発言に立つた諸団体の同志からは、一様に本実行委建設の巨大な意義と、社共一革マルはもとより、第四インターを中心とした野合右派プロツクの日和親主義をはねのけ、本秋期政治闘争とりわけ九・三〇羽田への武装進撃を克ち取ることが決意表明されたのである。諸団体の決意表明を終え、シユブレビコールを行ない、果

敢なデモンストレーションに移つてい
ブルジョアマスコミの「実行委＝武闘
というキヤンペーンもあつてか、我が
に對する弾圧は熾烈をきわめたが、そ
のともせず、終始戦闘的デモンストレ
ンを貫徹したのである。解散地におけ
る集会のあと、実行委の組織だった行動
政治警察の解散過程における一切の弾
さなかつたのである。

そして翌一五日、関東労闘委は午前
らの全労交集会の総括集会が開かれて
野ホールにおいて、当日夜の集会への
呼びかける情宣活動を展開し、夜の清

園における日「韓」闘争会議粉碎中央總決起集会に都学活と供に結集したのである。集会は全国から七〇〇名の革命的労働者・学生の結集をもって克ち取られた。結集した諸団体（各地方実行委を含む）から、九・三〇羽田現地への武装進撃の決意が語られ、熱気につつまれつつデモンストレーションに移り、機動隊の弾圧を一切よせつけず、シナブレヒコールを行ない、戦闘的デモンストレーションを貫徹したのである。日比谷公園での総括集会は九・三〇羽田現地への巨大な大衆的結集と武装進撃の決意に満ちあふれ、その日の闘闘を終えたのである。

関東労闘委神奈川会議と横須賀社研は、北湘南・川崎・各地区の戦闘的青年労働者三〇余名を結集し、九・三〇天皇派米阻止羽田決戦へ向けた神奈川実行委員会を結成し、この闘いを圧倒的に領導した。アジアの民族解放——社会主義革命闘争に恐怖した帝国主義の侵略反革命・差別——分断攻撃の嵐の中で、帝国主義労働運動の解体とそのなかでの革命勢力の獲得、インフレ、不況下での解雇撤回闘争そして企業整備（大独占による企業乗つとりによる）に対決する反合、反弾圧闘争を拠点と、実行委形成に進んだ、わが同志達の破竹の進撃に対し、最も恐れをなしたのが神奈川県警であつた。九月二八日実行委結成集会で

ロギーとの対決から逃亡し「儀礼論」「宗教論」という敵の攻撃の性格を曖昧にさせる日和見主義・排外主義との対決を通して、プロレタリア権力闘争の地平からこの闘いに決起しきい。神奈川の地でも二九日の前段闘争へのアリバイ的結合にとどめる傾向が自称前衛的活動家のなかで発生したのに對し、この実行委のみが唯一全県的に大衆的決起を可能とした事は、彼らの自称前衛・職場サークル・地域サークル性という地域主義・サークル主義の限界（それを突破する契機は彼ら自身の内に宿っているのだが）を大衆的党派闘争・権力闘争の二重的展開をもつて我々自身の手で止揚せねばならぬ。

拠点一地区を除く共通の利害と團結を必ず前
提とせねば、その改良闘争自身も勝利し得な
い。ここにこそ今日の階級闘争の性格は孕ま
れている。

わが同志を中心とした実行委がこの課題に
肉迫し先行的に闘い得てゐる事実は重大であ
る。この成果のもとに、そして何よりも二九
日・三〇日を闘い抜いた革命派の責務のもと
に、職場サークル・地区サークルを統合し、
民主主義闘争・改良闘争自身もそれが革命派の
指導の内に包摂し闘い抜く事が、帝国主義
(国家権力資本家、民間反革命)、排外主義
(社共勢力) に対決する道である。

革命党の形成、その独自勢力の拡大の道で
ある。革命党の闘いを一層強化し、一切の日
和見主義・経済主義を粉碎し前進せねばなら
ない。

対し会場周辺に私服を徘徊させ、県警警備課は、「県公安条例違反であるから集会をやめろ」という公然たる介入を行つて来た。所轄の係官でさえ「こんな事は始めてです」といふ具合に、革命的労働者が天皇制・天皇制イデオロギーと真向うから対決し全人民的政治闘争を組織していく事に対する支配階級の恐怖を、それは有々と見せてゐる。しかし我々は、天皇派米阻止闘争の階級的意義と革命的青年労働者の任務を結集した全員で固い決意とともにに確認し、集会を最後まで貫徹した。二九日、三〇日の闘争において、この集会での意志確認の成果がいかんなく發揮され、神奈川実行委の隊列が戦闘の前衛となつたことはいうまでもない。

わが同志達と戦闘的労働者達とが、革命派労働者運動の地平を防衛し發展させる上で、この種の党派闘争は不可避である。自称労働者階級の工作者を任じてゐる諸君らが、改良の果実に闘争の本質とその發展を限定づけ、解雇撤回闘争という階級的な闘いを、工作一般にすりかえてしまつた決定的誤り、またそれらの闘争の過程で労働者を階級的に打ちましたとしていく上で決定的に重要である政治闘争――プロレタリア権力闘争の全視点から組織する事を放棄し、既存の組合機関の奪権闘争――のみを戦略化する指導の経済主義、狹まざは反程でまた全ての労働争議・地区闘争の中で、い。全金細川、本山、そしてヤシカ闘争の過

九月戦闘と、そこで確定された団結の成果を、十月三里塚・沖繩・部落闘争、そして職場闘争に結合させ前進せよ！！

天皇制——天皇制イデオロギーの帝国主義支配・差別・分断・除外主義対決し、実行委を党の独自勢力——プロレタリア権力闘争陣型のもとに改組し——一月闘争に勝利せよ！！

天皇派米の本質を凝視せよ！ 破闖会連続講座第3回報告

破防法と闘う会主催の連続講座は権力支配の実態のバクロとそれの認識という地点にとどまらず、主体的な実践上の課題を明確にすることに力点がおかれているが、「天皇訪米に抗議する」と副題の付けられた、第三回「大衆社会の転出と神の復活」においてもこの視点は鮮明に貫ぬかれた。丸山照雄氏、菅孝行氏が報告し、参加者との活発な討論が行われた。

人民抑圧の犯罪者として天皇一族は連綿と日本に生き残っているのであり、反革命の中軸としての天皇制の打倒は、日本人民の主体的飛躍の環であることは明確である。階級闘争史を総括するプロレタリアートの視点から天皇制を見ないかぎり、心情的な敗北主義にとらわれることは自明である。

暴露出してゐる。市民主義、それに屈服した政治組織が、訪米に抗議するといふ一般的な意志表示にとどまってしまったのは何故か。天皇攻撃が権力実態からかけ離れているかのようだ。錯覚し、「儀礼」とのみ把える思考こそが問題なのであり、それは一掃されなければならない。日本人民の革命性をひきだす試金石であり、日本帝ブルジョアジーの延命を絶対に許さないための根本的な課題として天皇制との闘争を把握することが必要である。

菅孝行氏は、象徴天皇制が、日本民族の歴史的な総括とその上にたつ「象徴」として支配者が語ることによって、歴史上の天皇制の中でも、最も強力なものとなつてゐることを強調した。天皇制の論議が反対派、擁護派入り乱れてはなばなしの、反対派の論理の中には「土着回帰」もしくは「民族の原点への回帰」といった内容を通じて天皇制支配にからめとられていく傾向があると指摘した。転向問題を通じて種々に語られたことであるが、革命闘争の後退を私的的な統括におとしこめた

關係を喪失しているが故に、天皇支配に屈服している。天皇制を現実の日本帝国主義の問題を抜きにした天皇制論議は一切不毛である事を鋭く指摘した。

戦前治安維持法下で反戦運動はいよいよ及ばず、人民のあらゆる主体的活動の芽をつみとった天皇は、再度排外主義的国民動員の場に登場せんとしている。天皇制論議が一見自由に行われてゐるようみえながら、戦後のマイホーム主義的価値意識の国民的転換をかけた攻撃であることは明白であり、革命的な言論、表現活動への圧殺が日々強化されてゐる事態こそ、天皇登場の、政治的意味を鮮明に

皇闘争はそうした課題の中でも最大のものと
いえる。

権力はこの公開講座にも私服を配し、参加
者の監視を行つたが、政治警察の九月三〇日
に向けた革命勢力解体の一大弾圧体制は、天
皇派米のために人民のあらゆる権利をばく
だつせんとするものであつた。

排外主義的国民統合に対決するための活動
を日常的に、広範な階層の中に拡大すること
が不可欠であり、我々は破防法と闘う会を地
域に根をはつた強固な組織として形成しなけ
ればならぬ。

生協運動の新地平を切拓け！

革命的同志の皆さん、「遊撃」読者の皆さん！明大生協の闘う労働者は、ここ数年間に沈黙を破り、新たな運動の創出のために着実に前進していることを報告したいと思います。明大生協の地域からの「撤退」——タマ生已から「追放」されてから今日までに約三年間の運動の停滞は、明大生協という特殊な「域」の問題ではない。今日では全国の生協や「労働者福祉組織」内においても多かれ少なかれ、起っている問題だと我々は見ていく。「生協」をはじめとして、労働者、学生、人民の闘いによつて獲得され、建設されてき

ルジョアジーは、その闘いの「牙」をぬきとり、不斷の体制内化、階級協調の攻撃をかけてきている。とりわけ、そこに働く労働者を「士官一下士官」の関係におとしこめ、生協の経営的危機を背景にたえず、ブルジョア支配の下に組み込まんとする策動がなされいることを、するどく見抜かねばならない。

明大生協が、タマ生協等の地域生協建設に全面的に取組んだのは歴史的必然だったかもしれないが、むしろ今日、「追放」されてからの大明大生協において、生協と、生協労働者

組織的総括がなされなければならないだろう。「明大生協の歴史的『使命』は『追放』されたときに終った」などと言う文学的表現はどうでもいい。明大生協に働く労働者と闘う学生が、今もつてタマ生協の総括と、その総括主体を問題にしている以上、明大生協と労働者は、闘いをやめるわけにはいかない。こそ、明大生協と労働者の歴史的使命ではなろうか。

都市科学研究所発行の「生協に関する動態報告」は、生協の労使関係について次の様に言つてゐる——「運動の論理を持つていい、つまり地域に打つて出ないようなときは、労働条件の改善とか、賃上げ運動とか、ボーナスをもらうためにストライキをやるという現

關係を喪失しているか故に、天皇制支配の屈辱感が強化され、天皇制を現実の日本帝国主義のアジアにおける反革命的な役割の中で位置づける視点が絶対に必要であり、帝国主義権力の問題を抜きにした天皇制論議は一切不毛である事を鋭く指摘した。

戦前治安維持法下で反戦運動は、こうに及ぼす、人民のあらゆる主体的活動の芽をつみとった天皇は、再度排外主義的国民動員の場に行われているようにみえながら、戦後のマホーム主義的価値意識の国民的転換をかけた攻撃であることは明白であり、革命的な言論、表現活動への圧殺が日々強化されている事態こそ、天皇登場の、政治的意味を鮮明に

皇闘争はそうちした課題の中でも最大のものといえる。

象が出るわけである。」——このことは何のことではない、生協と生協労働者の矛盾を外に向かっていれば城内平和が保たれてくると言つてはいるだけではないだろうか。こうした指摘

をまつまでもなく、明大生協の地域進出が終ると（「指導者」から解放されると）矛盾が一挙に噴出し様々な自然発生的運動が起つてきたのは、如何に生協とはいえ階級矛盾とは無縁でない以上むしろあたりまえなのだ。明大生協において地域進出をやめて、すぐに様様な運動が起らなかつたのは、労働者の憤激を「経済的小ブル要求運動」として切つてすて官僚的支配機構をもつて抑圧していたからにすぎない。昨年度明大学費値上げ阻止闘争時の反ロックアウト闘争を従業員・アルバイトが一体となつて、自からの職場を奪うる闘いに立ちあがつたとき、ブルジョア支配の有形無形様々なたちをとつてかけられる闘争を対置しないかぎり、自からの職場を守れることを直感的であれ、闘つた者は感じていた。反ロックアウト闘争で不當にも逮捕されたF君の公判闘争においても同質の問題が即ち、生協における階級闘争の復権が各自につきつけられたのだつた。しかし、旧「指導者」たちとその隨伴者達は反ロックアウト闘争を口先では語りつつも、公判闘争に沈黙し、あまつさえ敵対する行為をするに至つて、多くの労働者の中に決定的不信感を生じさせてしまつたと見ていいだろう。彼らの行為が本質的に明大生協の經營的危機の突破のために左翼的言辞を取りよそい、闘争を收拾した、「エセ」「活動家」に根底的思想性をとうものとして、この間の闘いは、大衆的に行なわれて來たのだ。九月二十五日、関東労闘委明大生協会議およびかけの、生田店長糾弾闘争は、以上のような位相によつて圧倒的に勝ちとられて來た。この闘争は、けつして個人に向けられた闘いのみではなく、明大生協に色濃く残つてゐる経済主義的な傾向に対

象が出るわけである。」——このことは何のことではない、生協と生協労働者の矛盾を外に向かっていれば城内平和が保たれてくると言つてはいるだけではないだろうか。こうした指摘

する主体的切開の意義をこめた闘いであり、我々自身の全思想性をかけて実現しなければならない、生協労働者としての階級闘争の本格的幕あけとしてあつた。

我々の明大生協における闘いは、まず地域生協進出の総括主体を形成するところから始めなければならない。生協労働者としての階級闘争の本格的幕あけとしてあつた。

ついての存在する固な意志

闘争を自からの闘争として責任をもつて担なれることを厳しく拒否しつつ、公判闘争委員会の形成から始まつた。このとき、「生協全体で取り組む」運動なるものを主張していた「活動家」はもののみどとにその本質を暴露した。そもそも、業務ラインを中心とする（主任層を中心とする）運動が全体として一定の動員力と組織性をもつてゐるように見えても、タマ生協進出がそうであつたと同じようにそれを担う主体側の向いかけについては決定的に不十分であるのだ。

生協に働く労働者の中に不斷にわきおこる階級的憤激をいかにして党的布陣・プロレタリアートの戦闘陣型に結合するのかという指導責任こそが現在最も焦眉にとわれている課題なのだ。この課題を避けて「路線がない」などと言うのは全く没階級的であり、現実の階級的諸矛盾に何ら回答できない官僚主義へとブルジョア的に堕落することは明らかであろう。生協における、労働者モラルはまさしく激烈な闘いの中で作り出される。一連の糾弾闘争の中で闘う労働者は闘いを放棄する経済主義者にも、革命的自己批判をふまえ再度共に闘いに参加することを呼びかけている。

私もかわらず、さらに闘いを放棄する者たちはその闘争の中での生協組織の運営によるものであります。七〇年生協闘争運動における労働者組織は、

闘争を真に見るのはその闘争の中でのことである。生協内は政治過激化によって、労働者としての主体の問い合わせ、そして、何よりも生協における党的主体建設には少なく見ても数ヶ月の苦闘を必要とした。まず公判闘争を自からの闘争として責任をもつて担なれることを厳しく拒否しつつ、生協と闘争として取り組むこと（身銭を切つて）、あるいは擬似共同体の中にまるがかえ的に解消されることを厳しく拒否しつつ、公判闘争委員会の形成から始まつた。このとき、「生協全体で取り組む」運動なるものを主張していた「活動家」はもののみどとにその本質を暴露した。そもそも、業務ラインを中心とする（主任層を中心とする）運動が全体として一定の動員力と組織性をもつてゐるように見えても、タマ生協進出がそうであつたと同じようにそれを担う主体側の向いかけについては決定的に不十分であるのだ。

生協に働く労働者の中に不斷にわきおこる階級的憤激をいかにして党的布陣・プロレタリアートの戦闘陣型に結合するのかという指導責任こそが現在最も焦眉にとわっている課題なのだ。この課題を避けて「路線がない」などと言うのは全く没階級的であり、現実の階級的諸矛盾に何ら回答できない官僚主義へとブルジョア的に堕落することは明らかであろう。生協における、労働者モラルはまさしく激烈な闘いの中で作り出される。一連の糾弾闘争の中で闘う労働者は闘いを放棄する経済主義者にも、革命的自己批判をふまえ再度共に闘いに参加することを呼びかけている。

私もかわらず、さらに闘いを放棄する者たちはその闘争の中での生協組織の運営によるものであります。七〇年生協闘争運動における労働者組織は、

これと相應して、昨年の第3回集会に於いて交わされた論争点の一層の深化が図られねばならない。基調素案及びそれへの対案等の諸の見解表明を通した論争は、この第4回集会に持越されたものであり、相互の実践的批判を踏まえつつ、路線的相違点を鮮明にせねばならない。かかる論争を通してこそ現情勢下に於ける革命派労働者運動形成の方向性と任務が明らかにされる。(3)このことは、この間の労活による政治闘争への取組みが、労活に統一戦線の調停役を荷わせたり、市民主義的戦線へ組み込み「活用」したりする傾向として現出していることを見るならば、とりわけ重要である。

否定的特徴の一つとして、基調分散会の討論が極めて希薄であり、分散的であつたことが、から開始された討論が集中を欠いた最大の要因は基調自体の妥協的性格、体系性の欠如にあるが、このことは昨年の論争点を不鮮明にするものとして、労活運動の現在的危機をはからずも示していると言わねばならない。昨年の基調素案が、社共勢力との分岐を上げつゝも、そのことを個別闘争の徹底化と、それら個別闘争の合同労組形態をもつてする平板なつなぎ合せという域を出ず、またそれに対する戸村選挙派（第4インターを中軸とする）の「鏡原対案」に於ける極めて空疎な主張、即ち、「労働者大衆の流動化と左傾化」と、

う主導的の願望を根拠に一政府危機＝政治危機に對して政治的統一戦線を形成し、労活をその統一戦線的政治潮流の一翼乃至母胎とせよ」の無内容さの根拠は何如にあつたのか？それこそが徹底に問い合わせられねばならなかつたのである。しかるに今回の基調提案の意図的とも思える妥協的性格は、かかる討論を回避し、春闘構造の枠内に於いて「75春闘を打抜いた」とあるいは「民同指導部を突き上げた」式の「労活バンザイ」へと議論を横流ししたものと言わねばならない。これは地区反戦運動以来の拠点民同支配を打破り、革命潮流を全国化するという問題意識が、一方に於ける市民主義への密通構造、他方に於けるサンデーイカリズム、總体としての課題別主義としての統一戦線的願望を根拠に一政府危機＝政治危機の張してきた。殊に既成労働運動の階級協調主義との対決は本工、社外工、臨時工との差別分断を基礎とした春闘構造自体の解体一止揚を不可避としているのであり、かかる視点を欠落させるが故に巷に氾濫する「階級的労働運動論」や「プロ独派労働運動論」の經濟主義、組合主義的本質が発生するのである。本集会に於いて更には13日夜の日「韓」閨僚會議粉碎全国労働者総決起集会に於いても暴露された第4インターのいう「全国政治闘争」の人間戦線派への屈服がそうであることは言うまでもない。

三里塚――全国住民闘争勝利へ、死力賭け武装陣型を構築せよ！

三里塚空港粉碎、鐵塔死守、開港

三里塚空港反対同盟の十年におよぶ不屈な闘いは、常に階級闘争の新らたな地平を切り拓いてきた。特に六〇年代の反戦・全学連の戦闘的な翼との結合は、砂川基地反対同盟の闘いの質を前進させ、労農学を一体とした闘いへと結実していく。三里塚闘争は、初期の段階で社会党的後退、共産党的敵対（反納入の「話し合いによる解決」に唯一賛成し、条件派に転落した）に対して真に闘うものは誰なのかを全人民の前に明らかにするものであった。空港反対の「土地を守れ」という闘争から出発しながらも、農民だけに限定せずに革命的諸勢力に深く結合したが故に、反対同

盟は闘いの内でより強固に打ち固められていく。その周辺の闘いは、七一年九・一六東峰十
った。そして同時に反対同盟は、老人行動隊・字路機動隊せん滅戦に引きつがれ、敵権力を
青年行動隊・婦人行動隊を組織し抜き、政策として「日本におけるベトナム戦争のはじまり
反対のみに一面化することなく、生活総体をとりこんだ闘争へと強化されていった。新全
総反対としてあつた「むつ小川原闘争」は、農民のみの闘争として自己限定し諸勢力との
結合を目的意識的に切断したが故に、せいぜい支援の労学が「防衛」的な闘いから、敵権力
を追いつめる攻撃的な布陣を成したことであ
い地区労との共闘にとどめられ、町長選が一
面的に政治焦点化され、敗北した過程とは闘
争主体の側面においても、対照的である。ま
さに三里塚闘争は、強制測量粉碎闘争、第一
次代執行粉碎闘争におけるバリケードへ岩々
裁判所の分離公判攻撃をはじめとし
て五五名の起訴攻撃を行なってきた。まさに

歪曲され、革命的労働運動をその根柢に於いて、
て担い切るだけの質を現在の労活が有してい
るのか否かという問題に迄突き刺つていくの
である。實際、現在的な労活位相のままでは、
革命的青年労働者の闘いに答え切れない結果
を招くことは早晚明らかになるだろう。

我が同盟は、現在の労働運動の現実が同盟
・JC組合の反共行動隊としての純化と総評
民同の排外主義としての完成以外の何者でも
なく、戦闘的労働者の闘いへの「労」使一体
となつた圧殺攻撃としてあることを見るなら
ば、資本はもとより既成労働運動勢力との対
決、更には春闘構造自体の根抵的な解体一止
揚を推進しうる革命派労働運動の独自的潮流

もとより、現在の労活位相から脱却せんとす
る模索が開始されていることを示した。我が
同盟はかかる問題意識を糾合し、既成労働運
動との徹底した対決と労活内部に於ける市民
主義、組合主義との徹底した大衆的党派闘争
を媒介に、革命的労働運動の独自潮流を形成
し、更には9・30天皇派米阻止戦が切り拓いた
全国政治闘争の質を堅持し、労働者の新た
な戦闘陣型を構築し抜く決意である。

判をかちとり東峰統一被告団は、九・一六東峰戦闘の革命的意義を確認し、三里塚闘争を発展させ拡大する闘いを推進している。この裁判は、求釈明、被告全員の冒頭陳述をもつて裁かれるべきは誰なのかをより鮮明にしてきていく。われわれは統一被告団と結合して裁判闘争を勝利させる布陣を形成しなければならない。だがこのような三里塚闘争の歴史的・階級的意義を清算する諸君が登場した。いわく「第二次決戦における東峰十字路闘争を観念的に美化するなかから闘争を展望したい。第二次決戦の成果を真に継承し、発展させる」ということは、第一次決戦のなかでつくりだされた大衆的実力闘争と全国運動をいかに現在の情勢に適合させ実現するかといふことである。三里塚闘争に対する敵権力の攻撃と弾圧がいかに強力であると、われわれは決して戦術の一揆主義への道をたどってはならない。」（「不屈の三里塚」）この第四インターの主張は、東峰戦闘の戦術的批判に名を借りて、「組織された暴力」を否定し、三里塚闘争の発展にとまどい、以前の位相を懐かしがる市民主義的心情を吐露しているにとどまらず、三里塚闘争の革命的意義を後退した地平でヤユしてさえいるのだ。まさに、「戦術」は「戦術」として一人歩きするのではなく、単なる戦術形態のみに一面化されるの選択ではないと考える。三里塚闘争のなかで培われてきた国家権力の反革命暴力に對する一つ一つの闘いの蓄積が、特に第一次代執行粉碎闘争の教訓によつて、同時に全國から結集した労働者、学生、農民数千名の戦闘的闘争は歴史的に闘いとられたのである。この闘いの質は、東峰統一公判闘争、岩山大鉄塔建設へと脈々と受け継がれているのだ。「現在の情勢」を何かしら否定的に把え、それを基底にて今何が問われているかを突き出しえず、後退した戦術のみを対置してはならない。第四インターの諸君とわれわれのこの三里塚闘争のとらえかたの相違こそ、參院選への戸村氏出馬をもぐるわれわれと彼らの決定的相違であった。

また三里塚闘争は、全国の住民運動の最先端の位置を形成してきた。「日本列島改造」「新全総」を強行した権力は、そこで帝国主義

ブルジョア階級の憎悪をむきだしにした階級裁判は、求釈明、被告全員の冒頭陳述をもつて裁かれるべきは誰なのかをより鮮明にしてきていく。われわれは統一被告団と結合して裁判闘争を勝利させる布陣を形成しなければならない。だがこのようないいな三里塚闘争の歴史的・階級的意義を清算する諸君が登場した。

社会再編の野望を進行させていく、このブルジョアジーの政策に対し、全国さまざまな地域で住民運動が形成されてきている。特に三里塚空港についていえば、千葉・茨城へと闘いは拡大している。たとえば「時の権力者の面ののみを守るために世界にも希有な内陸空港をあらゆる暴挙と策謀によって強行せんとするこの大悪業をわれわれは一人の農民として断固として拒否します」（七一年九月戦闘宣言）でも明らかなるように、公団は空港の最重要問題の燃料輸送に何ら解決すべき方法を持ち合わせていない。本年七月二〇日、千葉市のバイオラインの沿線住民一万余名は工事差し止めの提訴を起した。このバイオラインは、すでに千葉市住民の強い反対運動が起きていて全長四四キロのうち約三〇キロ段階で、三年前から千葉市内ルートは未解決のまま中断されている。大塚公団總裁は「訴訟を起す理由が納得できず、空港を『開発させない』ための訴えではないのか、とさえ思える」（七五年七・二一「朝日」）と言わしめている。また一方政府は、空港閣僚協議会を六七年十月以来七年ぶりに開き、茨城県鹿島港に航空燃料基地（タンク）を建設し、鉄道で輸送する計画をたて、三年限りにすることを決定し、「開港可能」の世論操作を意識的に作ろうとしている。すでに七三年九月鹿島町、神栖町は鉄道輸送に反対決議をしているが、運輸大臣自からが両町に協力要請を行ない、命の前線基地として水戸に公団事務所を新設した。これに對して鹿島町農業委員会は、燃料暫定輸送に応対する決議を上げた。「空港公団は、町・町議会、大多数の住民の意志を無視し、あらゆる手段で裏工作を続いている。

（決議文より）

空港の最重要課題である燃料輸送について、政府・公団は、バイオラインが千葉住民の反対によつて破産すれば、バイオラインならば安全であると言明しておきながら、鉄道輸送に切り換えるという無定見振を發揮した上、それも反対されれば、買収工作によつて鹿島町の反対運動を切り崩し分断しようとしている。以上明らかにしてきたことは、三里塚闘争の勝利は、千葉や鹿島の住民闘争によつて、行動が開始され、さまざまに戦闘的部

社会再編の野望を進行させていく、このブルジョアジーの政策に対し、全国さまざまな地域で住民運動が形成されてきている。特に三里塚空港についていえば、千葉・茨城へと闘うことで、またこのことは、住民運動の総和が一切を規定するのだ。本年八月京都で開催された反原発集会において、住民運動を三里塚闘争のような非妥協的闘争にならないようにする、いいかえれば一般的な拡大・幅広いズムの市民主義潮流に転落する傾向が多数を示していいたことでも明らかのように住民闘争においても新たな階級協調主義が派生している。また成田市職労が「市の財政が圧迫されているのは、開港が遅れているからだ」として早期開港要求の直接行動として、本年九・一五には、市職・鉄労・日航労を中心とし、機動隊に防衛されながら開催した。政府・公団の世論作りの一環として動員され、彼らはより積極的に反革命に加担していく。このような反革命分子を最先頭とした徹底的に闘う側に分断を持ち込もうとする策動がなされている。三里塚闘争は、燃料輸送阻止をめぐって革命と反革命の明確な分岐が生みだされている。さまざまな燃料輸送阻止をめぐる闘争に組織されている部分を解体し粉砕しなければならない。今までに三里塚闘争は、反革命に組織されている部分を解体し粉砕しなさいにもかかわらず、滑走路に立ちふさがった大鉄塔撤去の策動を行ない、あたかも早急に開港の可能性あるかのよう世論操作を行なうことを許してはならない。

新全総・列島改造政策は、田中内閣の倒壊と「石油危機」にはじまる「構造的不況」、強行を通して、三里塚闘争をも含んで周辺のさまざまな闘争を破壊し、再編成を目論んだことは自明である。またこのようないいな三里塚闘争の拡大深化は、同時に三里塚闘争の拡大深化は、同時に三里塚闘争の進めかたにも当然影響される。このことは、青年行動隊を中心とした意識的なさまざま諸運動

（横浜新貨物線反対同盟全金本山）との連帯交流と同時に、農業問題への新らたな進展が

始まつてゐる（「執念城」）。

帝国主義農政の批判として農業振興法に対する闘いも組織されてゐる。帝国主義の「高度成長政策」は、農業において零細農民の切り捨て、離農の強制、それを媒介とした土地の集中、機械の導入による経営規模の拡大、そして農民支配として農協を通さなければ肥料、種苗の購入が不可能であり、生産物の出荷経路も一元化されてきた。このことで、中農家の農業經營が不安定化し、農家の子弟

は、若年労働力として都市に流入し、農業の現在的扱い手も現金収入のための出稼労働者として働くかなければならない状態に迫つてゐている。三里塚農民の十年の闘いの蓄積は、政府の空港建設の意図が、旧来語られてきただけではなく、農村解体の強要であり、まさに新全総の先取りであつたことを土地收用法粉碎闘争の過程でも見てとることができ

る。

港粉碎、鐵塔防衛闘争を九・一六東峰戦闘の結合した農民の闘争として前進し、三里塚空港粉碎、東峰統一公判闘争と結合して弾質を継承し、東峰統一公判闘争と結合して弾固闘い抜かなければならぬ。

部落完全解放、石川氏即時奪還へ 全力で10・31闘争を準備せよ！

昨年10月31日、日帝の尖兵、高裁寺尾によ

つて、無実の部落民石川一雄氏に対する憎むべき差別「無期」一政治判決がなされてから一年がたとうとしている。しかし、昨年全国から結集し、連日の如く万余の隊列をもつて日比谷一帯を制圧し、「狹山差別裁判糾弾！石川氏即時奪還！部落完全解放！」のコールをもつて東京高裁をゆるがした、闘うプロレタリア人民、そしてなによりも闘う部落大衆の憤激の炎は衰えることを知らない。否、今なお獄中にあつて病に身をむしばまれながらも、日帝権力と一切の部落差別に対する闘志をみなぎらせ、闘いを持続する石川氏とともに、ますます人民の怒りは大きく燃え上がるうとしている。

「最高裁上告趣意書」提出期限を来年1月28日に控え、再び10・31を迎えるとしている現在、われわれは、一切の手段、全ゆる努力を傾けて、無実の部落民石川氏を、日帝ブルジョアジーから闘う部落大衆、プロレタリア人民の手に奪いかえす闘いの決意を新たにしなければならない。われわれはなんとしても、12年余の石川氏の闘いと、これに応え決起した多くの部落大衆、プロレタリア人民の闘いを、狹山闘争完全勝利をもつて結実させねばならない。この闘いが決して余断を許さぬ厳しいものであることは、10・31判決そのものが示している。10・31闘争をメルクマールとして、部落解放同盟と共に闘う陣型の徹底した点検と準備が、ただちに行なわれねばならない。

(1)

まず、現在に至る狹山差別裁判糾弾闘争の到達地平を確認するところからはじめよう。

一九六三年五月二二日、「中田善枝さん殺

し」の「容疑者」として、無実の部落民石川一雄氏は、部落差別の予断と偏見を唯一の理由とした、別件逮捕攻撃を受けた。この差別逮捕攻撃が、何ひとつ「物証」を根拠としないフレーム・アップ＝権力犯罪であつた事は

全く明らかである。ブルジョア・マスコミの激しい差別キャンペーンの中では、警察における拷問にも等しい取り調べを受けた石川氏は、ついに「自白」を強要され、数々の「捜査」段階におけるデッчи上げをもとに、64年3月11日一審浦和地裁内田によつて死刑判決を受けた。

こうした事態の背景には、60年安保闘争とのり切り、高度経済成長の上にひたすら権力

再編と、侵略反革命の道を走つてゐた日帝の動向が存在していた事を見落としてはならない。かかる日帝の動向は、差別・排外主義の助長と、治安警察機構の肥大化に伴なう救いようのない腐敗を不可避としていたのだ。

しかし、石川氏は、差別攻撃の只中にあつて、ただちに不屈の闘いを開始した。同時に部落解放同盟を始めとする狹山差別裁判糾弾の闘いが開始され、広汎な支援と、部落大衆自身の決起とを生み出していった。とりわけ69年11月の、戦闘的部落青年による、浦和地裁武装占拠、実力糾弾闘争は、狹山闘争の尖鋭な政治的質を、全人民の前に明らかにした。

こうした戦闘的な闘いと、そして解放同盟支援の広汎な闘いの組織化によつて、狹山差別裁判糾弾闘争は、昨年高裁判決を控えて、まさしく、部落解放闘争の頂点的位置を占めると同時に全国的、全人民的政治闘争へと発展しようとしていた。9・26十一万人集会に示されたように、差別裁判と、部落差別への

衆、労働者人民をとらえつくした。

しかし、高裁寺尾は、この狹山闘争の大昂揚に対して巧妙な武装解除策動を行ないつつ、10・31石川氏への差別「無期」一政治判決を下した。われわれは、この判決に対する怒りと憤りを決して忘れてはならない。反革命差別者寺尾を決して忘れてはならない。

寺尾判決は、狹山闘争の全人民政治闘争としての革命的發展に対する、日帝ブルジョアジーの階級的恐怖感と、部落民に対する差別主義に徹頭徹尾貫かれたものであつた。我々は、その特徴と階級的性格を、しっかりと把みとり、二度と再びこうした攻撃を許さぬ闘いを作り上げねばならない。

寺尾判決の特徴の第一は、「石川氏＝クロ」の心証のみを終始一貫一切の判断基準に据えている事にある。寺尾にとつては、再開「公判」など「無期」判決の為の単なる形式であったのだ。

第二には、従つて、「事実審理」に関する全くのデータラメさを指摘しなければならない。「筆跡」「足跡」「三大物証」（カバン、万年筆、腕時計）など警察当局によつてデッчи上げられたもののみを「証拠」として採用していること、さらに、「自白」と「物証」とのくいちがいを示す「死体の状況、玉石、残土、殺害方法等」についての検討を全面的に回避している事は決して許されない。そして権力にいる事は決して許されない。そして権力にいる「自白」強要、維持工作を陰蔽していることを挙げることができる。これらは、被告弁護団が、全力を費して追及してきた事実問題に、何ひとつ寺尾が耳をかそとしなかつた事、ただただ、「クロ心証」と一審内田判決、二審井波「審理」にのみしがみついていた事を示している。

第三には、別件逮捕を公然と承認している

による「見込み捜査」を支持、正当化した事である。

とにより、逆に差別主義に骨の髄まで置かれていることである。部落差別なくして本件は存在しないのだ。

る事により、融和主義的屈服と鬨いの切り崩しをはかつてゐる。のみならず、「最高裁上告審」に際しては、「無期」の場合「事実審理、口頭弁論」を行なわせず「書類審査」でおわらせるという「慣例」があることを承知した上で出された、極めて悪質な攻撃である

こうした五つの特徴を貫いている寺尾判決の階級的性格とは何か。それが、石川氏自身にと、部落解放同盟を先頭に、ますます広汎にそして強固な団結をもつて狹山鬭争に決起する部落大衆、労働者人民への日帝ブルジョアジーの階級的恐怖感、危機意識の集中的表現である事は言うまでもない。ペトナム・インドシナ人民の民族解放－社会主義革命戦争の前進の中で、米帝はもはや、その戦後帝国主義世界支配秩序の崩壊を、公然陰然と承認せざるをえないところで追いつめられ、それに伴なつて日帝ブルジョアジーは新たなアジア反革命秩序体制形成に向かうことを強制され、アジア人民へ侵略反革命を強化せざるをえなくなつた。同時に一国的にも70年代の国際的なインフレ・不況構造への突入を反映して、一挙的な国独資体制の高度化にのめり込んでいった。これが結果したものは、帝国主義的権力－社会再編の強行的展開であり、労働者

人民への強取奪、大型産業合理化、日本列島改造成論に示される地域再編の強化であり、これが労働者人民、住民大衆の広汎な怒りを巻きおこしたことは言うまでもない。

科弾闘争、部落解放闘争を圧殺する事によりノジア侵略反革命体制作り、権力再編の軸心として差別排外主義的人民分断攻撃を意図したのだ。激化する階級矛盾と階級闘争に対する文字通り「しづめ」として部落差別を頂点とする差別排外主義の持ち込みが、制度的にイデオロギー的に画策された。そして第二に至る人民政治闘争へと発展せんとする狹山闘争を圧殺する事により、70年代の本格的権力闘争と、それを担う革命勢力の形成を封殺せんとした。60年代後半以降の反戦・全共闘運動の切り妬いた戦後日本階級闘争の新たな到達地平は、70年安保政治決戦をめぐる、わが第

2次ブントの党的敗北に象徴される如く、レーニン主義的党主体の不在のままに、一定の後退を余儀なくされてきた。しかし、激発する階級矛盾の中で、プロレタリア大衆の発揮

する「高次の自然発生性」は、いささかも衰えた事はなかつた。否のみならず、本格的な階級激突戦への突入を示唆するよう、労働者人民は、その革命的エネルギーを、自然発生的だとはいえ、至るところで、しかも 60 年代をはるかに上まわる広さと深さをもつて噴出させた。被差別部落大衆の闘いの集中した大爆発を日帝権力は恐れるがゆえに、一大差別反革命攻撃としての 10・31 判決はなされたのだ。

この二つの性格を抱つて高裁寺尾は、差別「無期」政治判決を、石川氏をはじめとした闘う被差別部落大衆、プロレタリア人民にかけた。それはまさしく、全世界的な階級対階級の大激突戦の時代に見あつた、日本における権力闘争の本格的開始の情況、革命を反革命の非和解的対決の時代の帝国主義の絶望的な攻撃だった。既に日帝ブルジョアジーは、その権力再編攻撃の鋭い質を、破防法社会の日常的実現をもつてなし切らんとしている。

こうした中につつて裁判所もまた例外ではない。否むしろ、日法をめぐる所謂「反動化」こそ刑法改悪一破防法攻撃の最たるものではないか。問われていたのは、如何なる民主主義闘争にあつても、それを権力闘争の時代のものとして扱い切る事であり、帝国主義ブルジョアジーと対決する非妥協的な闘いとその主体質である。昨秋 9-10 月狹山政治決戦は、これを闘う勢力全てに要求した。

なる「赤旗」論文において狹山差別裁判の性格を徹底して陰蔽し美化する主張を行ない重大な差別反革命敵対を行なつた。日共は、解放同盟と、部落解放闘争に対する鮮明な敵対者としての位置を、「正常化連」デッヂ上げ、狹山闘争への敵対などの中でますます明らかにしてきたが、さらに寺尾判決と歩調を合わせ、敵権力に、闘う部落大衆を売り渡し、解放闘争を破壊する攻撃を開始した。この策動は、その階級的本性が、日帝の左足排外主義攻撃の尖兵以外何ものでもない事をはつきりと示している。こうした策動は、今日では、9・21自民党「同和会」と「正常化連」との反解同の一点における野合、密月としての「国民融合をめざす部落問題全国会議」結成

をさえ生み出すに至つてゐる。我々はこの反革命日共とそれに追随する一切の差別反革命の部落解放闘争への敵対を全ゆる場所で徹底して分断しなければならぬ。

して岩石したければならない
更に我々が自からるものとしなければなら
ない第二の課題は、（我々も含めて）戦闘的

諸勢力の内に孕まれた、「融和主義」的傾向との不斷の対決である。この誤りは、根本的には日共と同一の思想的根拠を持つてゐる。

我々は、第2次ブントの党的総括の中から、プロレタリアートに根拠をおく党という視点をわがものとしてきた。この視点からすると

き戦前日共における27テーゼ、31テーゼ草案、32テーゼ間のジグザグとりわけ水平社との関係にさるそれは、田共のこうしたままでせ

伊におりるそれは、日共のこうした意味で決定的な欠陥を持つていたことを示していく。

（の）が示しているように、日共にあつては、階級関係と階級闘争こそが、一切の歴史の發展を、根底的に規定するという、マルクス主

義的観点は、かくとくされる事なく、従つて結果的に見れば、觀念的な「下部構造」の発展段階規定に終始し、綱領の原則的部分この

けるプロレタリアートの觀点と共産主義政党の任務は不間に付されてきたのだ。階級対立の矛盾に苦悶の見入る、つまらぬ暴力として

の矛盾と発展の軸点つまりは唯物史観の欠落は、必然的に「歴史的に引き継がれてきた階級闘争としての部落解放闘争」という観点

のかくとくを妨げた。これが、部落解放運動と共に産主義との正しい結合を終始妨げることとなつた決定的根拠であつた。一貫した部落

解消論に貫かれたながら、あるときは徹底した部落大衆への利用主義、ある時は、指導の放棄とハラジングを示してきと田舎二日市夫

「共産主義革命は、今までの後れ」。所
産主義運動の思想的到達地平の根底的切開が
今こそ、マルクス・レーニン主義の復権の努
力中で徹底的に行なわれなければならない。

